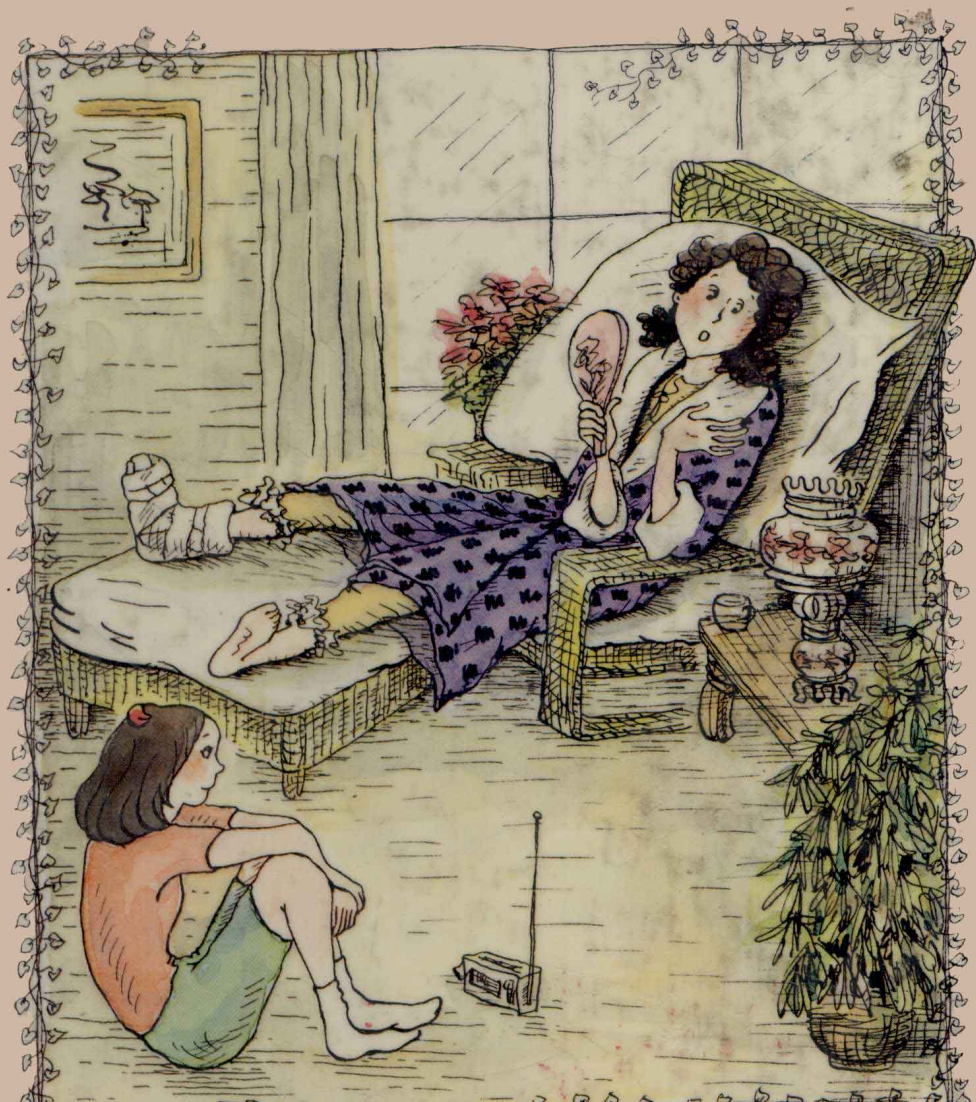


わたしのママは しずかさん

角野米子



913 かどのまいこ
角野栄子

わたしのママはしずかさん

偕成社 1980

178p. 21cm (長編創作童話・2)



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

わたしのママはしずかさん

1980年3月 初版第1刷

著者 角野栄子

発行者 今村 廣

発行所 株式会社 偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話 東京(260)3221 振替 東京5-1352 番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

©角野栄子 1980

◇乱丁本・落丁本はおとりかえいたします

Published by KAISEI-SHA, printed in Japan

8393-727020-0904

わたしのママは しずかさん

角野栄子



人間は、みんなひとりひとりがうのだから、おかあさんだって、ひとりひとりちがっていたって、ふしぎではないわ。それは、わたしにもちゃんとわかってるつもりよ。

だけど……。

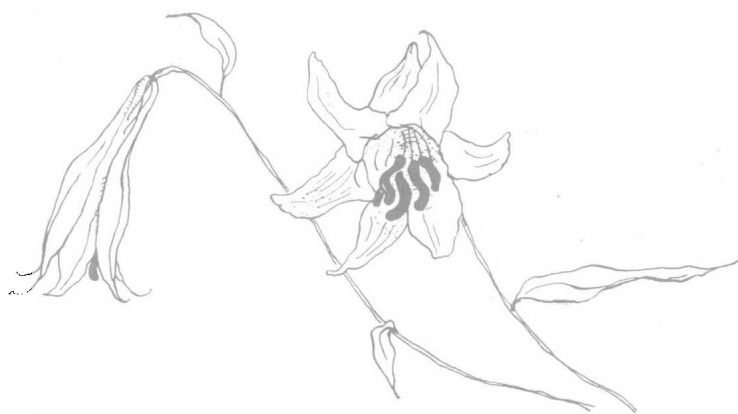
わたしのしずかさんは、ちょっとちがいすぎるのではないかしら。ふと、このごろ不満を感じるのです。自分のおかあさんに不満を感じたりして、いいのかしら……もしかしたら、わたしはとっても不孝な、そして不幸な子どもではないのかしら。

こんなことをときどき考えるのは、近ごろ、わたしがむやみやたらと、からだが大きくなったことと関係があるのかもしれない。たぶん。ママを「しずかさん」、パパを「ケンタ氏」とよびたくなるのも、そのほうが、いまのわたしの気持ちに、なぜかびつたりするからなのです。



もくじ

しずかさんとガラス	8
しずかさんは一びきおおかみ	21
しずかさんとおまじない	35
しずかさんとカカシの足あと	49
しずかさんともうひとりのおかあさん	66
しずかさんと結婚 ^{けっこん}	80
しずかさんと京男 ^{きやうおとこ}	93
しずかさんとフランス料理 ^{りやうり}	108
しずかさんと自動車 ^{じどうしゃ}	121
しずかさんとハイハイ自転車 ^{じてんしゃ}	139
しずかさんのひみつ	157
解説 西本鶏介	176



著者 角野栄子

東京に生まれる。早稲田大学卒業後、出版社に勤務。のち世界各地をまわり、ブラジルで二年間生活する。帰国後、童話を書き続ける。おもな著書『レイジンニョ少年』『ネッシーのおむこさん』など。

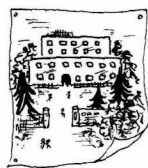
画家 小谷あかね

満州（現在の中国東北部）に生まれる。一九七二年にアメリカに渡り、児童画及び油絵を、四年間勉強。帰国後、児童画に専念する。

わたしのママは
しずかさん



しずかさんとガラス



きょうは、一学期さいごの授業参観日。教室のうしろには、『わたしたちの学校』という題の写生画が張りだしてありました。卒業をまえにして、六年三組のみんなが、それぞれ力をこめてかいたものでした。

休み時間になると、参観のおかあさんたちはこの絵を見あげて、すごいおしゃべり。おたがいにほめあったり、謙遜したり、なんだか競争みたいにいいあいっこしているのがおかしい。

そんななかで、ミッチちゃんのおかあさんは、ミッチちゃんと肩をよせあつて、静かに話をしていました。

「よくかけてるじゃないの。いっしょうけんめいかいたこと、ちゃんとわかるわよ。このさくらの木かげ、とってもすずしそうですね。」

「そこは苦心したところなんだ。」

ミッチちゃんは得意そうに、光った目でおばさんを見あげていました。

わたしは、ふたりの話を偶然ききながら、ミッチちゃんが写生の時間に、「風に色つてあるとおもう？」とか、「この木のかげも、風でゆれているように見える？」とか、きいたことをおもいだしました。ミッチちゃんのおかあさんは、子どもが苦労したところを、ちゃんとわかる人なのです。

いいなあ、とおもいながら、ぼんやり立っていたら、いきなり、ぱーんと肩をたたく人がいます。わたしのママしずかさんでした。

「リコ、あなたの絵のなかの窓ガラス、水色の線が斜めに二本はいつているけど、めずらしいガラスねえ。きれいだわ。ああいうガラスは、どこに売っているのかしら。」わたしは、ガクッとからだを泳がせるようにふざけてみせました。でも、心はほんとうにガククリ。

ガラスというのは絵にかこうとすると、むずかしいのです。あるようでいて、ないみたいで、でもやっぱりあるから、「ここにガラスあり」って、立て札を立てたくなっちゃう。でも、そうもいかないから、わたしは考えたすえ、窓わくのなかに二本の水色の線をかき入れたのです。

「一年生の絵みたいよ。」「これは工事中こうじちゆうのしるしなの。」こういう批評ひひようだったら、まだがまんするけど……ひとの苦勞くろうも知らないで……まったく。

「こういうガラスがあったら、よかったのにねえ。ほら、リコ、おぼえてるでしょ。ママが学習がくしゅう塾じゅくで大失敗だいしつぱいしたの。」

しずかさんは、クックと小さくわらいました。

あれは、五年生のおわりの春休みのことでした。しずかさんはとつぜん、教育ママきようようママへんしんへんしんしてしまったのです。

夕食ゆうしょくのあと、新聞しんぶんを読んでいたしずかさんが、とつぜん顔をあげて、うれしそうにいったことからじまったのでした。

「リコ、ブラジルの奥地おくちの原住民げんじゅうみんにね、一年じゅうお祭りまつりをしている人たちがいるんですって。毎日まいにち、毎日まいにち、お休みなしよ。ちょっと、すてきだとおもわない？」

運動靴うんどうぐつが小さくなったせいかしら、左のかかとの大きなうおのめがへんに痛いたんで、わたしはお祭りまつりどころではないのです。きっきと指でねじってもとれないし。

「ふーん。」

まあ、こんな返事^{へんじ}しかできなかったんです。

「あなた、おもしろくないの。毎日^{まいにち}タイコをたたいて、チャンチキ、チャンチキやっているのよ。」

しずかさんはおしりをふって、おどるまねをしてみせました。

「だけど、ママ。毎日^{まいにち}がお祭り^{まつ}だと、お祭り^{まつ}でない日と、いったいどうやって区別^{くべつ}するのよ。」

「いやだなあ、想像^{そうぞう}力^{りき}のない人^{ひと}って、そこにはタコヤキ屋^やさんがあるとか、金魚^{きんぎょ}すくいがあるとか、どうして、そういう楽しいこと^{たのしみ}をきいてくれないの。」

「いえ、いえ。」

と、わたしはおおげさに首^{くび}をふってからいいました。

「こっちはね、その想像^{そうぞう}力^{りき}とかが豊^{ゆた}かすぎるもんで、ちょっと心配^{しんぱい}になってきたのよ。だってさ、ぶくつと太^{ふと}った日本人^{にほんじん}のおばさん観光客^{かんこうきゃく}の丸焼^{まるや}きなんか、ついでに売りだすんじゃないかと……。」

「いやあねえ。あなたの話は、すぐそこにいくんだから。わたしのことだったら、美容体操^{ようたいそう}してからでかけますから、どうぞご安心^{あんしん}ください。」

しずかさんは、ふざけてジャンプを三回^{かい}してみせました。

どうしたわけか、それを見て、わたしはちょっぴりまじめな気持ちになってしまったんです。

「ママ、お祭り^{まつ}もいいけど、これから六年生になるむすめをもっているんだってこと、わすれないでよ。いまは、たいへんなときなのよ。毎日^{まいにち}の勉強はきびしく、心は晴^はれない。そういう感じ^{かん}なんですから。」

「ほーう、リコ、あなた、もしかして勉強がすきなのだ。」

しずかさんは、わたしをじーっと見つめました。

「きらいっていったら、ママ、どうする。」

「それ、あたりまえだとおもうわ。子どもですもの。」

「ママは小さいとき、勉強しなさい、っていわれたことないの。」

「ええ、ないわ。それが、なにか……。」

「おじいちゃんもおばあちゃんも、のんきだったのねえ。さびしくなかった。」

「えっ、さ、び、し、い、ですって。へんなこという人ねえ。」

しずかさんはびっくりしたような、こまったような顔をしました。



「それで、ママはそんなにのんきなかなあ。いま日本のふつうのおうちではね、勉強のたいへんな子どもがいたら、なるべくその子の癪にさわるらないように、うちの人^いは息をひそめて暮らすとか、お夜食には消化がよく、カロリーの高いものを、なんて気をつかったりするのよ。ところがママときたら、チャンチキ祭りなんですよ。」

「へーえ、よそのおかあさんって、そんなことするの。」

しずかさんは、あわただしく目をぱちぱちさせました。

「ミッチャンのおかあさんなんてさ、つきつきりで勉強みてるんだって。漢字は声をだして、読みながら練習しなさい、って。」

「ふーん。」

しずかさんは、うなったような声をだしました。なぜだか、わたしから目をそらして、おどおどしているみたい。いつものように、ばんばんやりかえしてこないのです。「リコ、あなたはだいじょうぶよ。もともとおりこうさんなんだから。ママはね、そんじょそこらのおかあさんとはちがうんですよ。かめばかむほど、味がでるくちでね。」でも、その声には、めずらしく力がありませんでした。

こんなことがあってから、しずかさんは、いろいろなことをいうようになりました。

「あなたの書く7の字は、クエスチョン・マークみたいな形かたちをしてるわよ。」

「アルファベットを紙に書いて、お手洗てあらいに張はっておいたから、一日に一どは声をだして読みなさいよ。」

「いってきます。」というのと、「いってらっしゃい。」のかわりに、「自動車に気をつけて。」というようになり、「ただいま。」というのと、「おかえりなさい。」のかわりに、「手をあらって、うがいをして。」というようになってしまったのです。

^{へや}部屋にひとりでいると、^{ろうか}廊下を足音をしのばせて歩いたり、ドアが音もなくあいて、お化けのごとくプリンやホットケーキがとどいたりするのです。それがなれていないというか、いかにもやってますって感じかんで、わたしはとつてもつかれてしまうのです。そのうちにしずかさんは、目と目のあいだにしわをよせて、むずかしい顔をするようになりました。家のなかの空気まで、さびしいぐらい静しずかになってしまいました。

「ママが変身へんしんしちゃったの、どうにかしてよ。」

わたしは、ケンタ氏しにたのみました。

「ママはいっしょうけんめいなんだよ。つきあってやれよ。そんなに長いことやない